

昭和四十八年十月二十一日

郷土資料

第五十九回

史跡めぐり資料（国府台城）

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

第五十九回 史跡めぐり案内

一日 時

十月二十一日(日)

午前九時三十分 越谷駅集合

一場 所 国府台 里見公園

越谷駅 十時出発

牛田駅 乗替 京成関屋

国府台駅 下車

国府台城跡

里見公園

総寧寺

弘法寺

帰路 越谷駅 下車

会費 五百円

昼食 埼玉のこ

附近に食堂あり

目次

一、国府台史跡めぐりの始めに

一、国府台城 日本城郭全集 3

一、鴻台城 諸国廢城考 卷三十一

一、国府台初度合戦 關八州古戦録 卷六

一、国府台後度合戦 關八州古戦録 卷六

一、総寧寺 全国寺院留鑑(市川市)

一、弘法寺 ()

始めに

市川市国府台城の史跡めぐりに当り古書を用いて見ますと、歴代の関東の一拠矣と有る事として重代の歴史の深さを感じます。日本書紀の神代の頂に大八州国云々と有り、此の八州国より四神出生と有る。又陰陽本記に曰、湯津石村、所成之神中略兒盤筒男盤筒女二神、相生之神兒、経津主神、今座下総国香取大神是也と。又遠く萬葉の歌人の中にも下総の歌が有ります。

古に在りけむ人の倭文幡の帯解きかへて
伏屋立て妻同いしけむ葛飾の真向の手兒
名が奥つ城をこことは用けど真木の葉や
茂りたるらむ松が根や遠く久しき言のみ
も名のみもわれは忘らゆましじ

反歌

われも見つ人にも告げむ葛飾の真向の手
兒名が奥津城處
葛飾の真向の入江にうちなびく玉藻刈り

けむ手兒名し思ほゆ

詠勝鹿真向娘る歌并短歌

雞が鳴く吾妻の国に古にありける事と今
まに絶えず言ひ来る勝鹿の真向の手古名か
麻衣に青袴著け直さ麻を裳には織り著て髪
だにも搔きは梳らず履をたに穿かず行け
とも錦袴の中につつめる齋兒も妹に如かめや
望月の蕩れる面わに花の如笑みそ立流れば
夏蟲の火に入るか如水戸入りに船漕ぐ如く
行きかぐれ人のいふ時いくばくも生けらじ
ものを何すかと身をたな知りて波の音の騒
く湊の奥津城に妹が臥せる遠き代にありけ
る事を昨日しも見けむが如も思ほゆるかも
反歌
勝鹿の真向の井を見れば立ち平し水汲まし
けむ手兒名し思ほゆ

反歌

伊勢物語 今昔物語 更科日記 等々にも
下総と武蔵との境の話が出て来ます。

国府台城

松戸市国府台

総武線の電車が江戸川の鉄橋に差掛ると、上流に老松の聳える高地が見える。此れが馬琴の「八丈佐」で名高い国府台の城址で、里見城とも言った。此の台地は武蔵から房総に入る要衝で、奈良朝時代には此処に国府が置かれた。城址の西側は江戸川に臨んで二十五米の断崖となり、東は専葉沼の湿地帯が天然の堀の役目をして、要害の地であった。文明十一年（一四七九）下総の豪族千葉氏が二つに分かれ、千葉胤胤は石浜城に、千葉孝胤は一族の臼井俊胤の守る臼井城に籠って争った時、太田道灌は胤胤に味方して臼井城を攻める爲此処に出城を築いたと言はれる。其の後も国府台城をめぐって戦乱は続いたが、中でも天文七年（一五三八）と永祿七年（一五六四）の二度にわたって、此の台上で戦われた里見・北条の激戦は、最も有名である。

天文七年十月安房の一角より興った里見

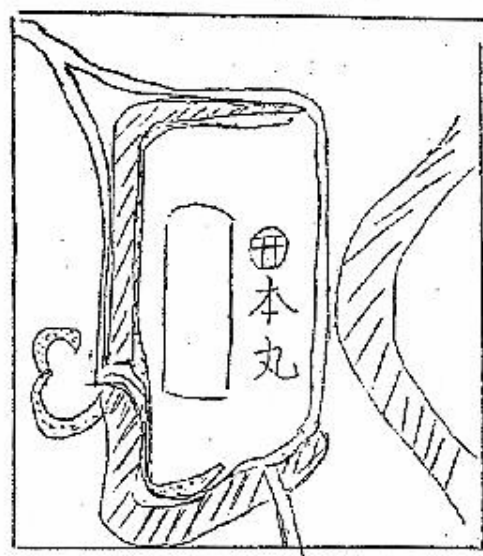
義光・小弓御所の足利義明と弟基頼を推して、房総軍七十騎を率いて国府台に陣し、城塞を築いた。此れに対して古河公方と足利晴代を奉じた小田原の北條代綱と子の代康は、三万余騎を率いて江戸川を渡り、国府台の北方、松戸の相模台に進出した。此の報を受けて義明は相模台に転進し、激戦の末、弟頼基と共に討死した。

此の合戦から二十六年たった永祿七年（一五六四）正月、里見義光の子義弘は、兵八千を以て再び国府台に出陣した。此れに対して北條代康、代政父子は、二万余騎で江戸川河畔に迫った。此の時義弘は前回の苦い経験から松戸の渡しの守備を固め、一部の軍勢を国府台の南方の直向の丘の麓に配置して北條勢を誘い、攻撃して来たら退却して丘上より反撃しようと言う作戦に出た。北條勢は此の策略に引掛って、先鋒部隊は全滅した。

里見勢は此の大勝に気がゆるみ、其の夜は国府台上の館で酒宴を開いた。そのすま

とついで北條の一隊は松戸附近から渡河して国府台の背後を廻り真向の森に伏せ、翌朝どつと国府台へ攻め込んた。あわてた里見勢は大混乱、たちまち三千人が戦死し、美弘はやつと安房に逃がれたが、此れから里見氏は衰え、上総・下総の兩國は北條氏の勢力下に入った。又此の戦で岩槻太田三兼資正も出陣したが大敗北して岩槻に逃げかえた。其の年七月に至り北條方と頼五郎代資の爲に岩槻より追放され二度と帰城が出来なかつた。

今、城跡は里見公園となり、空堀、鏡掛松などの旧跡がある。



国府台城
見取

諸国廢城考 卷 鴻台城

文明十一年 太田道灌臼井城を攻めし時、此城を築いて此れに拠る。其後小弓の御所美明威勢広大に成て関東と対治し、総領家を差置て 関東の長者と成べしと企てけるよし聞ければ、古河殿より北條代綱を内々たのみ有て 美明を対治有るべきと也。代綱既に打立と聞えければ美明は急ぎ中途に馳せ向て防けとて、舍弟基頼と小弓の御曹司を先鋒の大將として里見美光と副將軍に定め、房州 兩統の軍兵を催し当城に擁籠り市川を前に當てそ待懸けたり。去程に代綱は天文六年十月小田原を打立其の勢二万余騎にて当城に馳向ふ。敵味方互に進み出て打ちつ討たれつ戦ひけるに、美明遂に横井新介の爲に射られて死にければ、残る兵とも皆小弓へそ歸りける。

奥八州古戦録 卷六

総州国府台初度合戦付正木大膳亮(時経)勇力事

房源の勢岩築の西勢、国台に出張(由)南方

へ相向へける改代政宣ひけるは、彼等は関

東の強敵卒爾に擬作し難し、しばらく我馳

向ひて一軍すべしとて俄に伊豆、相模、北

武蔵の人数をばせ集め速に打出らる。相従

ふ人々には長男相模守代政、大石源三代照

三男秋又太郎代邦、六条新六郎代晴、同姓

左衛門大夫綱成、嫡子常陸介代繁、次男福

島弥次郎頼季、同姓伊賀守勝広、松田左衛

門佐則孝、長男左馬介、同姓兵衛大夫秀植、

大道寺駿河守直宗、堀和伯(はか)齋守綱可、伊勢

備中守貫連、多米周防守長宗、清水太郎左

衛門、同姓又太郎、同姓右馬亮、笠原能登

守、山角四郎左衛門、荒川豊後守、内藤備

前守、依田大膳亮、太田下野守、岡上佐渡

守、萩蔵人、中余出羽守、庄式部少輔、毛

呂土佐守以下二万余騎、魁首は北余左衛門

太輔、二隊は松田右衛門佐、後備は北条新三

郎、大道寺駿河守なり、爰に江戸丹波守直

景、葛西の富永四郎左衛門政家は代康被官

の中にも骨切の剛弼なれば、大敵眼前に打

出たるに人に先を駈られては屍の上の恥辱

なりとて執るものも取あえず有り合ふ人数と

打振て遠山は行徳筋、富永は小松川筋へ馳

出けるか、流石に代康の下知をも受す。

私の先途後日の批判如何なれば、一往先隊

に可なるべと相議し、福島、小用が陣に候

者を飛せ、然しかの存念を述て先途を申受

る旨申送りければ、左衛門大夫綱成、領き

いしくも所望尤なり。弓矢の本意黙止難し、

さあらば其意に任する条随分忠戦を励まさ

るべし。空賢、仕損し給ふべからずと返答

す。息男常陸介、松田父子相供に不信心の

面色にて、今姑く思案もあらるべしやと申

しければ、綱成聞て完爾と笑ひ、身不肖な

から某魁首の命を蒙りし上は、他に譲るべ

からざる事勿論の議たりといへども、当家

に於て松田殿、綱成等が先かけは、例式に

して珍しからず。向後とても幾度か陣頭の

手並を顯すべし。凡戦に臨むの法、こが功を絶らとせず。敵を破るを以て功とす、何か前後とあらそはんや。

其上望見、太田の二将は厨左に於ては剛敵なり。遠山・富永兩人も当家警れの侍大将なれば、面前の敵を見て不得止事先登を望むからは生涯の粉骨を振はずんば有るべからず。細成苟くも其の榮機を奪はんは、おとなげなしと申しければ、松田を初理に折れて重ねて詞は無かりけり。

往時右大将頼朝郷、陸奥の御館泰衡を追討の時、島山庄次郎重忠先陣として既に奥州伊達の都に打入り、厚借山を過ぎて大城戸に攻入らんとせしに、其の夜三浦平六郎義利、葛西三郎清重、工藤小次郎行光以下七騎先登を志して、濳に島山が陣所を乗越しけるに重忠の家子、榛沢六郎成清、是を見付けて制止めんとな義務をしければ、庄次郎頭を押えて彼の面々予に先達て敵陣に打入り駆破り武勇を振ふは忠義歴然たるの上へ是も又重忠が魁首の余輝と云いつべし。

況や衆人に抜んで戦を励む族、その素忠を妨げんは鋭士の鋒先を折くに似て弓矢の本意に有るべからず。何か重忠一人の抽賞を願ふべきや。そら知らずして有んが却て神妙の儀たるべしと申しけるを、その時の人皆美談として感りしとかや。今福島細成が裁判先將、後將一揆にして感せぬ者こそなかりけり。

余程に遠山・富永は細成が返答にて胸中の霧を挑き勇みに勇んで向ひけるか。是を最後の軍とは後にこそ思ひ合せける。斯して「市川を前に当て兩人備へを立敷きけるに、敵方是を見ていざ欺きて寄手を呼引節所へ引懸討取るべし」とて、此は永祿七年癸亥正月七日の夕方真洞の鶴の台の麓に出張して居たりし人数を山上へ引拳たり。

寄手はか信る謀ありとは知らず、房源勢退散するぞと心得先登を甲迄て是まで進んだら甲斐なく差向ひたる敵を阿容々々と引かしめんは一期の名折たるべければ矢底に押しかけ打留むべしとて市川を打渡り国府台の

坂下へき特々と詰寄せたり。

折節臼井の原上野介胤繁が旗本に大矢口の
高城治部少輔二百騎にて馳着しかば遠山、
富永彌祝を得て八日の辰の刻斗りに関を作
りかけて奥声出しかつき連ねて坂中迄攻登
る所に房原の陸頭正木大膳亮時綱、同彈正
左衛門父子馬の鼻を双て、真先に乘出して
摩訶て下知をなし、鉄砲をつるべ打ちにう
ちかけ、矢継早に散々に射たりければ、寄
寺なしかば、避ふべき、的となりて討る者
数を知らず。真向の坂を下るとききなく、
ともなく、繼橋を指して引退く。

房州勢勝に來りて、鋒先を添え切先を並べ
て一周にどうと駈下して、爰を先途と戦ひし
かば南方勢忽に捲り立てられ敗軍と見へし
所に堀和、清水、多米、内藤、山角己下鉄
砲の責武者靈に先寺の軍始りぬとおぼへけ
れば、援にて押来り新寺を以て切つて懸る、
黒川権右衛門、浜野修理亮、川崎又次郎と
云ふ岩嶺の勇兵等得たり賢しと馳合せ、姑
く挑み戦ひけるが、清水太郎左衛門は老武

者たれ共無双の大力なりければ常に好む櫻
の棒を振廻し四角八方を薙倒す。

是が爲に太田新六郎鐔本より太刀打おら
れ無念にや思けん。味方の陣へはせ戻し、
太刀なければこそ清水には駈けまけたれ。
さらば某を棒して敵の目に見せ、清水
をも薙落して野原の土と成しぬべしと、八
尺に余りし例の鉄根棒のエボ繁く打ちたる
を振り援け、乗替を引せたる七寸斗の驪
(黒馬)の馬の太く遅しきにゆらりと飛来り
一息継いで出立ちたり。

康資今年三十三歳極めて大の男の馬に乗
りて、長い鉄の棒を持ちたりければ突然
大山の樹木と共に揺ぎ出るが如くにして敵
も味方も振あをのき是を見ずと言者なし。
康資寄手を真中に会釈もなく割りて入、
清水に渡り合せんと思へしかとも見へをり
ければ、今け力なし、相手にのあらばこ
そとて蜘蛛かく繩十文字に割たて、遂に廻
し横手に振ひ、尻居に打ちすへ十八九人ま
で難伏ければ付近敵こそ無かりけり。

其時遠山丹波守直景徐々と馬を乗寄せろ長五丈斗りにして、なにぞや新六郎今日の翔ひ見事なり。然し乍ら人を撃たんは仔細なし。馬には咎もあるべからず。由なき罪つくりは何事ぞや。弓矢取る身のならひなれば親子兄弟智勇敵となり味方と成るも尋常の例にして今更左右の儀に不及、恣の軍の雜兵の手に懸らんより首鑑を脱て来るべし。遠山直景が功に替て旧領安堵をせしむべし。疾々と申しければ、太田康資聞て、あな事もおろかや。若る大事を思ひ立つ身として何の眉目あつてか再び南方へ降るべきや。命を塵芥に比するなれば此地に屍を晒さん事素より望む所なり。但し今に始たる御芳志は辱し。今生の暇迄に御太刀影を蒙らん。忝り候と云ふまじに鉄撮棒執り直し法華の首題を唱へ乍ら微塵になれと打付たれば、さしも大剛の遠山深田の中へ藉居られ起も挙らず息絶えたり。実に兎はくだけながら首は胴へ懸入りたれば屯ぶき様なかりけり。是を見て康資諒乍らも勇なれば便なくや

思いけん。首を取るにも及ばばこそ馬の鼻を引返し其の場を退かんとしたりければ、是も直景の智たり。川村修理亮に高城治部少輔、太田下野守等新六郎と脱をしと討て懸る。房州勢も太田討たすなとて馳入りて相戦ふ。敵味方入乱れ黒煙を立翳め、紅波指を渡す。引組て刺違ふるも有り、首を捕も取らるるあり、いづれ手明は見えざりける。其中に川村修理介、高城治部少輔は正木大膳亮時綱を目に懸りて組て勝負を決せんと左右より馳寄たり。大膳亮心得て馳けてはあしかりなんと馬を颯と馳退け素手に寄せたる川村が甲の真甲打破り直剛に切落し、返す太刀にて引手の方なる高城が膝のつかいを薙抜いければ屯りも敷えす馬より落ちて即座に死す。抑此大膳亮は元末三浦等にて代々房州正木郷に住し里見家粹一の宿老なり。器量骨から人に勝れ、強力の精兵たり、童名を又太郎と云ひしか、十二三才頃より好んで馬を乗りたりけるが片手綱

にて馳せしまゝ、故老の族見物して片手綱にて来る事は馬の駄引、隅の口鞍を固め手続き鎧ツツワの擬作まで会得してこそ然るべきに、初心の業には怪我あらん台なりと誠の儀を申しければ、大膳亮打笑つて、夫は平士の覚悟たり、因扇米配を才懸る身は下り立て鎧を合せ太刀打をせんとするは邂逅の事にして多分は馬上の働なれば紙令束形は鬼にもあれ鞆づよに達者なくしては武前の用に立つべからず。

是を以、某は修練を励む者なりとて倍々稽古怠なく、儲こそ荒馬をも自由自在に乗りたりけり。十八才に至りし時刑部大夫義老老者の家人を集めて宴会を催されしに古来剛強の談話に及び、義亮申されけるは、異国の並賞と云る人士は牛の角を引抜けたりと伝へ聞きたれと本朝にては未だ左様の沙汰なしと申されける。大膳亮追ひ出て推参りから某誠に技て見申さばやと望みしかば義亮興ある事なりとて頓て庭前に牛を穿せられしに大膳亮立寄り、角を左右の手に

握り只五月雨にてをぬく如くに最安く引放たり。満座一同に肝を消さすと云者なし。形の如くの太刀緋威の鎧に同毛の大鍬形訂たる兜を着、つき毛の馬に紅の厚総掛け素占め四尺六寸の太刀の巾二寸許なりしを蛤齒に治けて刃向ふ敵を切つて落す。其の形勢魔燈修羅士、帝秋天の荒振給ふ粧ひも斯くやと思ふ斗りなり。相次ぐ時綱が嫡子正木弾正左衛門敵兵六七騎切倒せば、加藤左馬亮朝朗、同姓新六郎、片南七郎、矢嶽五郎、金駒藤治、鷲沼源吾、大山新八郎、森源七郎等思ひ思いに分取して、勇を揮て戦ひしまま富永四郎左衛門、太田下野守、山角四郎右衛門、中条出羽守を先として北条家名字の士百四十騎、雜兵九百余人討たれて残兵退散したりけり。此時は代康は後陣に有りて其の儀を聞き大いに怒り時を移さず押寄せ、後爰の一戦然るべしとて同も透さず川を渡し、真岡・国府台の前面に列を督し備へを立弱手へ向へける福島・松田が相図おそしと今や今やと待たれる。

関八州古戦録

卷六

国府台後度合戦付里見・太田敗北の事

借も北条左衛門大夫は遠山・富永が所望に仍て先登をゆたねて後、松田左衛門佐に密談しけるは庠か如きは国府台は西北の方切崖高く隣なれとも東南は巧なりと云、崖より廻りて敵の後背より不意を襲い相図を以て大手、搦手より攻立なば勝利疑へ有べからず。如何あらんと申しければ松田も究竟の術出来たれ。宣しからんと同意して代康の聴に違す。万松軒大に喜び、是を一向二衆の働一段の武略こさんなれ。代政をもさし副へき旨疾打立候へと申されしかば、兩將則代政を伴ひ葛西筋より市川の川上迦羅鳴起の頼を渡して真向、国府台の東南へ押着け、發を潜め、陣を取敷て姑く人馬の息を休む。其間に福島が合屬大橋山城守、横瀬忠兵衛はさる覺の者にて心剛なれば密に敵陣の様子を見て参れと伺せけるに、大手初度の戦ひ既に終つて、敵勝戦したりし

ままた悦の螺吹て竹葉つかひゆるゆるとしてぞみへたりし故、急ぎ馳飯て敵は甚油断のよりを申しければ、福田、松田、早勝ちたると、時分よしとて真向の森張より相図の旗を颯とさし挙げ、木の根、梢の端をたつき戻をどうとぞ挙げたりけり。折しも小雨降出して、北風指を吹きければ、山谷に響きて夥し。大手にも件の相図見るや否や図を合せて攻登りける。敵方大いに周章して勢を二隊に引きわけ東西へ向つて防ぎ戦ひけるが、今朝の軍に粉骨して疲れたる武者新子の寄手に不意を討たれ四度路に成て見へたりける。然れども美弘、三乗は勝れた武勇の主将なり相従ふ里見の一族正木党(武田)・真里谷・多賀・芦野・山川・勝山數度の軍に馴れたる剛の者一足も引かじと駆入りて攻戦ふに左工門大夫綱成が手先切崩され、一人当十の被官二十余騎忽に命を損し、横江忠兵衛、同助九郎、堰田宮内亮、木村領田、岡宮新兵衛、佐枝甚五郎以下十四騎を(中山本欠ナシ)残たる綱成も他黄八幡の捺物を所々切りさかれ、鎧の袖、甲の吹返し

に立所の矢三筋折りかけ、既に危急にせまりし所に子息常陸介代繁の因扇打振、嶺に下知して是を球い、敵方爰にと五十余騎打たれて引退く、相模守代政、松田右衛門佐、笠原能登守も自分突戦し駈乱されければ房源の勢心は矢盃なれとも前後を敵に按立てられ終に敗軍したりける。義弘も嵐ももと云ふ逸物の駿馬に打乗り、敵三騎切つて落し、五人に平負せ、樊会周勃か勇を振われしか、流石来て馬の草脇に窺探に立、膝を折れば乗放し歩立に成て今は詮かたなしと断をせられし所に安西伊予守実元騎寄て馬より飛下り、轡を取つて引向け、軍は是迄にて恐乍ら此馬に召されて早々御退散あるべしと、人数ならぬ某にて候得共大節の時に至れり、未未迄の思ひ出に御諱をゆるされ防ぎ矢を致方へぞ落らせたり。安西は其場をたじろがす終に其所にて討死せり。里見家重代の文割、大切鉾といへる名刀も此一戦に失いけるとぞ。大田資正入道は北条氏康の寺前に向て力戦しニヶ所の底を蒙りながら、猶築居をふまえておりしか、南方の勇士

清水太郎左衛門が長男又太郎と組てせり、をふとみえしか、三衆は戦ひ疲れたる手負武者、清水は聞ゆる大刀なれば資正を取て（押へて）首をかかんとせしか、何とがしたりけん救ねたり。其時三衆眼をあらけ、やア汝はうらたえたるや、我首には喉輪あり、迦してかけて申しければ又太郎うなつきしていしくも指南せられたり。真剛なる最後の際感し入て待るとて、頻て喉輪を挺く処に太田近習舎人孫四郎十九才、野本五次郎十八才打れて馳来り、又太郎を引倒し三衆に着せ補せ直に戦場を退きけり。新六郎康資も死生を不顧奮撃し（テ）敵ヶ所の手（ヲ）負ひ切抜て市川の上（ノ）瀬を馬にて乗越し岩築さして落居す。正木大膳亮時綱は手の者僅二十人斗に打なされて前後を見あわせ和へ居たるを南方勢四五百人、短兵急に一打てわかる。時綱先に進んたる敵四人胴切にしてくらの前輪にし押懸、そりたる太刀を押なして又（ハ）九人迄（切ふせ）彼是都合二十一人打倒しなきは義弘の跡をしたひ、上綱の方へぞ落行りり、嫡子源正左

衛門は敵へ五騎切て落し、猶駈入て戦ふ処に
山角守かけ寄て、無子と組み西馬が周に落
重り、正木（カ）左の寺を以て山角を取て押
へけるを、馬の上より落さまに右の腕を突打
ちしかけ太刀を執て刺すに堪へず、押殺さん
と思ひけるにや、突々声を出して押付る周に
山角下より刀をぬき三刀さす。一刀はとさら
さりけれどもニ刀は腰のつかいとおほしくて
通りしかは終に正木をばね返しへて、首を捕
て指あけたり。其外里見民部少輔、多賀後守、
正木左近大夫、同平七郎、勝山豊前守、薦野
神五郎、鳥井信濃守、同悪七衛門、秋元将監、
長南次郎、加藤左馬允、同新平等踏とどまり
三十余人を彼にて討れけり。凡て此日の戦ひ
に北條家へ獲たる首五十三百式拾余級、南方
勢の討死は三十七百六十人とぞ聞へし。凡其
弘、三業か如きは智勇とい、角はかり敵に不
意をおそわるへき入傑にてはあらざ、けれ共、
極運の致すか、誠に油断大敵の基なりとはけ
様の事をいふならん。此時の落書に

よし弘くたのむる夫の威は及て
からきうき目に、太田身の果

軍散して後、乃松軒の陣中へ左衛門大夫綱
成父子松田左衛門佐を扣き寄（セ）、酒食を
もてなし、一礼有て今日、三将の勳功、拔群
の由感せられ、吾邊等なかりせば豈味方の勝
利たらんや、

吾（カ）家に於ては漢家の三傑に比すへし
とて大に褒美せられける。

総持寺

市川市国府台三十一
総武線 市川駅

曹洞宗

本尊釈迦牟尼化境内八千坪建物本堂座裡山
門鐘樓他由緒安国山と号す、永徳三年、江州観
音寺城主佐々木六角判官氏頼を刷基とし、
同州江左槻庄樫原郷に創建東安寺と称し、
通約を請して用也とした。永禄年間正親町

天皇から綸旨を賜わり一宗の僧録に任ぜられた。天正三年北条氏政の帰依をうけ、下総別荘に移り現寺号に改称。慶長一七年徳川家康の帰依により朱印地ニ。石の寄進をうけて大僧録に任ぜられ、一宗の主権を統かつた。寛永年同徳川家光は朱印地を加増、一八三石となり幕府の格式行遇はあつくなつた。その後寛文三年現在地に移り、寺門は榮えた。また毎年正月一六日に將軍に伺候、納経拜礼布施永ニ五貫をうけ、そのほか將軍からの供物も多く常例十万石以上の大名と同じ行遇を慣例とした。当寺支配下の末寺七十余カ寺、地方には録所寺院三〇を数え、朱印地は三百有余におよんだ。嘉永年同火災にあい文久年同再建したが、明治維新に寺領を上地してやや衰えた。同一四年大本山から賞状をうけた。現在末寺四五ヶ寺。境内には大きなぐみの木があり、道鏡の分骨堂といわれる法王塚、夜泣石（三〇センチぐらい）がある。

住職 照井文亮師(五五世)

弘法寺 (由緒寺院) 日連宗

市川市真府町一ノ三六〇

本尊宗祖奠定の大曼荼羅状迦如未像(日頂作)行事寺古奈神祭(四月八・九日) 甲子大黒天周帳(毎月甲子日) 境内一万六十坪建物祖師堂客殿書院方丈鐘樓寺古奈靈堂寺宝文書二通(嘉曆三年・康曆三年各筆) 甲子大黒天象山・猿虎洞中継・長同山もと・真宗寺空海の遺跡という。建長年中住僧了性が村主の富木五郎胤麿の一男を弟子とし伊豫房と命名。伊豫房は後年宗祖の弟子となり日頂と改名。文永一一年本尊を刻み安置してから本宗の寺院となる。弘安二年胤継が本尊の周眼供養を行った。寺内に真間の継橋、明応八年に日隆の建てた法華経供養碑のほか古碑七基がある。

住職 鈴木惠隆師

(全国寺院名鑑より)